

聴力検査

耳がちゃんと聞こえているかどうか
それを測定する検査を
聴力検査と言います

この検査にはヘッドフォンを

耳にかけて普通に音を聞かせる

気導聴力検査(図60)と

耳の後の骨にレシーバーを

あてがって音を聞かせる

骨導聴力検査(図61)とがあります

こうして2種類の検査を行うのは

それによって耳の中の病変部位が

推定できるからなのです

耳の中は

外耳・中耳・内耳の3つの部分から

できています(図62)

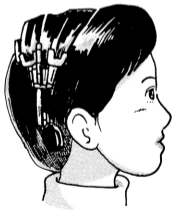
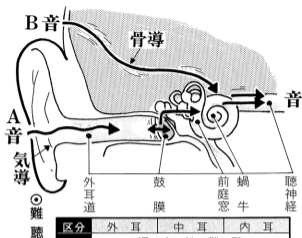


図61



図60



◎難聴

区分	外耳	中耳	内耳
種類	混合性		難聴
	伝音性		感音性

図62

これらのうち内耳の有毛細胞から奥は音を感じ
 聴神経へと伝える部分で外耳と中耳そして
 内耳のリンパ液は有毛細胞に振動として
 音波を伝える部分です

このため内耳の奥から先に原因のある難聴
 つまり聞こえの悪さを感音(性)難聴

外耳から内耳リンパ液にかけて

原因のある難聴を伝音(性)難聴と称します

ところで 気導聴力検査では音波は外耳・

中耳・内耳と伝わり(図62・A音)

骨導聴力検査では音波は内耳へ直接入ります

(図62・B音)

このため 内耳に原因のある感音難聴では

気導骨導ともに検査成績が悪く

主として外耳から中耳に原因のある

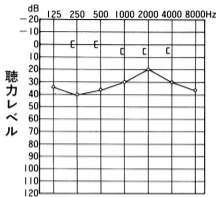


図63 右側伝音(性)難聴

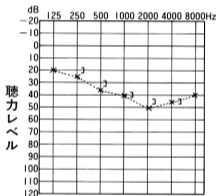


図64 左側感音(性)難聴

- 右気導
- ×...× 左気導
- [右骨導
-] 左骨導

伝音難聴では気導聴力が悪いのに骨導検査の成績が良いという結果を示します
これを表示するのに
オーディオグラム(図63・64)という方法を用います

この表では聞こえの悪さの程度とその周波数そして難聴の種類を読み取ることが出来ます
ここでは右の気導聴力を

○で示して実線で結び
右の骨導聴力を
右空きの括弧で示します
左は気導聴力を×と
それを結ぶ点線
骨導聴力を左空き括弧で示します

このオージオグラムでは
 右側が高い周波数の域値を
 左側が低い周波数の域値を示しており

○×もしくは括弧が

下に位置するほど

大きな音圧でなければ聞こえない

つまり聞こえが良くないということ

意味しています

図63は右側伝音難聴の例の

右側のみを表示したもので

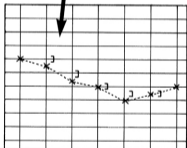
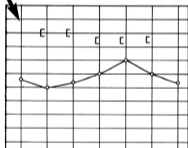
骨導聴力が良いのに

気導聴力が悪いことが理解できます

また図64は左側感音難聴で

気導骨導ともに検査成績の

良くないことが見て取れます



なお

通常オージオグラムは

両側をひとつの表に

示すものですが

ここでは理解し

易いように

一側ずつ

書き表してあります

こうして聞こえの悪さを

数値化することにより

難聴の性質や程度が

一目で判ります

そしてそれは

耳の病気の診断や

治療に直結します